

地域の会 10/5-6 女川視察報告

日にち	平成26年10月5日(日)～6日(月)
内 容	5日(日) 女川情報交流館及び周辺視察 6日(月) 女川原子力発電所視察
視察参加者	<p>－委員－ 浅賀・新野・石坂・川口・桑原・佐藤・三宮・高桑・高橋(武)・高橋(優)・竹内・武本(和)(6日のみ)・武本(昌)・千原・徳永・中原・前田 5日…16名 6日…17名</p> <p>－オブザーバー－ ・東京電力(株) 柏崎刈羽原子力発電所 地域共生総括グループ 杉山課長 中林副長 徳増主任 (6日)</p> <p>－事務局－ 柏崎原子力広報センター 石黒主事</p>
対応者	<p>5日 女川情報交流館 東北電力(株) 女川駐在地域総括 田山副本部長 東北電力(株) 女川地域総合事務所 三浦所長代理</p> <p>6日 女川原子力発電所 東北電力(株) 女川原子力発電所 八重樫発電所長 東北電力(株) 女川原子力発電所 渡邊発電所長代理 東北電力(株) 女川原子力PRセンター 松川所長</p>

- 5日は、女川情報交流館及び周辺視察を行った。
- 6日は、東北電力(株) 女川原子力発電所の視察を行い、東日本大震災当時の被災状況やその後の安全対策等について説明を伺った。3号機シースルー見学を予定していたが台風18号の影響によりやむなく中止となった。その後、構内を一巡し津波対策(防潮堤)や電源確保対策(大容量電源装置)等を現地確認した。
- 質疑応答では、主に震災直後から現在における発電所に対する地域住民の反応や、震災当時の被災状況、震災から得られた教訓などを問う質問があった。
- 委員感想を以下にまとめた。

〈委員〉

震災時に地域住民の方々を約 3 ヶ月もの長期間にわたり原発敷地内に受け入れていた事に対して敬服し、日頃から地域住民との信頼関係を醸成されている証であると推察しました。

また、事前情報で、セキュリティチェックが厳しいとお聞きしていましたが、台風の影響で 3 号機シースルー見学が不可になり、その体感と見学が出来なかった事は誠に残念でした。

〈委員〉

台風 18 号の影響の為、女川原発建屋内を視察出来なかった。残念な事に大きな目的が果たせなかったので、主たる感想が書けない。

3. 11 当日、津波を受けなかった事（立地が高かった）が住民の避難所となった事、数ヶ月利用されていた事は大きく、住民の方々は助かったと思う。

それは女川の津波で壊滅した街の様子を見て肌で感じて理解出来た。病院が建っている高台から、町を一望した時には、説明の出来ない無力感に襲われた。今は、穏やかな港のある入江とガレキが片付けられ、三階建のコンクリートの建物が横倒しのままであり、住まいの無い街中央に規則的に点滅する信号が異様に見えた。町の人口の 1 割近くの方々が犠牲となられたと伺った。あらためてご冥福をお祈りしたい。これだけの文化国家であっても自然災害の猛威に人間の無力さを感じず。防災がどこまで出来るかわからないが、英知を結集して出来得る限り被害を少なくしたいと考えた。

視察旅行はやはり必要である。

昨年同様、被災地を目の当たりにして、肌で感ずる事の意義、大切さを痛感した。

行政の方に、防災担当される方々、多くの方にもぜひ東北へ足を運んでいただきたいと切に願います。ありがとうございました。

〈委員〉

あの坂を上りきれば女川の街並みのはずだ。しかし、そこで見たのは津波で消えた荒涼たる風景だった。「跡形もない」まさにそういう表現であり、言葉を失った。

6 年前の平成 20 年 5 月下旬に仙台に所用があり、ついでに牡鹿半島を周り女川の街を訪ねた。やや狭い道路沿いに立ち並んでいたあの街も、撮影した JR 女川駅の面影すら全く無い。来年開業予定という洒落た駅舎が、ポツンと工事中だった。

さて、本題の視察であるが、台風 18 号の影響で、女川原発は警戒態勢とのこと。だから、原子炉建屋内へは入れず残念だった。

事前資料にあったように、津波対策として 3. 11 後に 3 m 嵩上げた防潮堤を更に 1.2 m 高くする工事の最中だった。このような「さらなる安全対策」については、大いに評価してよいのではないかと思った。

台風とはいえ海岸を走行中、バスの屋根まで波しぶきがかかり、地盤が 1 m も沈下したことを体感した。記憶に残る視察となった。

〈委員〉

10.05 視察計画確定後、抜けられない急用で、遅れて夜遅く、石巻の宿舎

ホテルに入った。

女川は、1970年代初頭から何回も訪れた、懐かしい地域である。当時は養殖漁業が盛んであった。女川港はサンマ漁船等の荷下ろしや生活用品積み込み港でもあり、知人は回船問屋を営んでいた。

3.11以降、今回の女川訪問は震災後3回目だった。

最初は「福島だけが注目されているが、女川の被害の深刻さを一度見ておけ」との仙台在住の友人からのアドバイスで2011年秋に仲間3人と訪問した。津波で家を失い、小学校グラウンドの仮設住宅で暮らしていた知人のお見舞いと惨状を直接観るためだった。津波で壊滅した女川市街や所長が殉職した女川のオフサイトセンターを回り、発電所近くの塚浜地区小屋取まで行った。小屋取は、雛壇状に家が建っていたが最上段の家だけを残し無残に破壊されていた。船着き場は1mも沈下したため海中に没していた。

石巻市は市街地が津波で浸水したり、火災の門脇小学校や津波で流された住宅地がほとんど手つかずで放置されていた様子が印象に残っている。また、女川原発周辺の牡鹿半島全体が福島第一原発からの放射能が降ったために汚染が大きいことに愕然とした。女川原発のモニタリングステーションの空間線量は柏崎刈羽の10倍を超えた値を示していた。

2004中越地震、2007中越沖地震では被災半年で相当の復旧・復興が進んだのに、宮城・福島の復興は著しく遅れていた。それが、原発事故のためなのか、2004中越地震・2007中越沖地震がM6.8の地震で被災範囲が30万、10万人と少ないため、全国から支援があったことと比較して、3.11は関東から東北一帯が被災地となるM9.0の巨大地震のためなのかを、今も考え続けている。

女川原発視察で3つの質問をした。

Q：女川原発は福島からの放射能を観測したと記憶しているが、その際の話が聞きたい。

A：1号機の爆発時に南東の風だったため、13日未明から通常の1000倍相当の $21\mu\text{Sv/hr}$ を観測した。高い放射線量を示すモニタリングポストの周辺立木の枝払を7月になって実施した。

Q：原発は運転から使用済核燃料の処分まで、核燃料サイクルがまわって初めて、運転が可能となると考える。使用済燃料の貯蔵実態や、将来見通しを聞きたい。

A：女川の使用済燃料プールは余裕がある。再処理をするのか、そのまま貯蔵するのか、議論が続いている。

Q：石巻も女川も3.11東北地方太平洋沖地震の津波で甚大な被害を受けた。原発は地元復興のために誘致されたものだが、生活基盤が破壊された現在、地元の原発に対する見方は変わったか。

A：震災以降原発に対して厳しい意見が増えたと感じている。

東北に行く際には、いつも小型線量計を携帯し、空間線量を測定している。今回のバスの車中からの測定では、宮城県ではほぼ $0.05\mu\text{Sv/hr}$ 程度であったが、福島県に入ると高くなり、最大は二本松付近の0.23であった。3.11から3年半が経過し、半減期2年のセシウム134は1/4程度に減少しているはずなのにまだまだ高い値である。

放射線管理区域以上汚染地域に一般住民の日常生活がある現実を直視しな

ければならない。

〈委員〉

今年は、昨年の福島に続いて委員アンケートの希望通り、関係各所のご支援をいただき女川発電所と女川の街の様子を視察させていただきました。

台風のため発電所の管理区域には入れなかったものの3月11日発災の前後も含め、貴重な体験談や考え方等を聞かせていただき、大変参考になりました。

個人的には3回目の女川ですが、多くの委員が初めてであり津波の力の大きさを改めて実感できたと思います。何より、県外視察の意義を再確認いたしました。

定例会では語り合えない内容を話し合えたり、旅人として出向いた先の人々へ思いをはせたり会のために記録作成や資料集め等協力し合ったり、また私たちの地域との風土や関係性の違いも学べたように思います。

帰りのバスの中での話の中にも、いくつもの発見、貴重な体験や思いが語り合わせ充実した時間を過ごすことができました。今後の活動に生かしていきたいと思います。

〈委員〉

初日、女川情報交流館で女川町の震災復興が着々と進んでいる説明を聞きました。

しかし交流館に置かれていた3.11当時の写真を見て、とてつもない被害を受けたものだと再認識し、改めてお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りいたします。

また新しい女川町を築く皆様には、一日も早く安定した生活ができるよう願っております。

二日目の女川原子力発電所の視察は折しも台風当日になり、発電所自体が厳戒体制の中、東北電力の方々が良く受け入れてくださいます感謝いたします。

私事ですが、建設当時定格出力が45万kWだった1号機のリアクターフィードポンプ（RFP）の運転開始後、年一度の定期検査に4年間通って来ていました。（現在は出力アップをして52万4千kWとなり他社の製品になっています。）

朝の体操をした場所もあり、台風最中とはいえ懐かしい思いでした。

女川原子力発電所があの大震災を耐えられたのは、原子力発電所を運営していく際、基本中のまた基本である原子炉を「止める」・「冷やす」放射性物質を「閉じ込める」ことができたからだと言われ、さらにそのためには正に命綱である外部電源・非常用電源の確保ができたからだと言われて、それができなかった1Fの不甲斐なさが残念でなりません。

浸水を防ぐための大掛かりな防潮堤工事の最中ですが、安全設備を完備し早期再稼働ができることを願っています。

〈委員〉

台風が迫りくる中で行程を変更せざるを得ず原子炉建屋内見学が叶わなかったことは残念だったが、風雨の中にも拘らず丁寧な対応をして下さった発

電所の所長様やサービスホールスタッフの方々を始めとした東北電力の皆さまに御礼を申し上げます。

女川発電所を訪れるのは初めてだったが、同じ原子力発電所であり同じ炉型でありながらもこれまで見慣れた柏崎刈羽や福島第一・第二とは違った印象を受けた。事業者が違うのだから当然とはいえ、本来は柏崎の電力供給事業者である「わが東北電力の発電所」に「いつもと違う」感覚を持つという事がおかしいのだとも思う。

同僚委員とその点について話し合っただけで気づいたのだが、この感覚は東京市民が柏崎刈羽に対して持つ感覚に通ずるところがあるのではないかという事。それは消費地と発電所が離れたところに立地しているため「自分たちの使っている電気がどのようにして作られているのか」関心を持ち続けることが難しいという事に他ならない。

ハード面の安全対策においては当初から敷地高さを決める際に社内委員会の想定高さを大幅に上回る高さに決め、その後得られた新知見に対応して補強工事を行うなど特に津波に対しては相当の安全性を考慮していたことが伺えた。しかしながら実際の震災では地盤沈下分も含め津波との差はわずか80cmだったとのこと。それを受け防潮堤が更にかさ上げされるという。

その対応を顧みると今となっては遅きに失するが福島第一で同様の対応が為されなかったことは只々残念というほかはない。

一方、そもそもの発電所の立地という観点で見たときに、強固な岩盤が浅震度に存在するという点については好条件なのだろうが、それと相反して外部からのアクセスという点についてはバスの車酔いを心配されるほどの山道、それも降雨量によってはすぐに通行止になる道路が主と聞いて不安を感じた。実際東日本大震災時には土砂崩れで外部と数日間隔絶されたと聞いた。

地域との共生という事については、東日本大震災時に女川発電所で避難してきた地域の方々を受け入れていたという話は以前から聞いていたが、それが3カ月にも及ぶ長期間であり、震災直後は備蓄食料を社員の方々より優先して避難者へ配布したことなど震災直後の対応を伺い、地域との信頼関係が想像以上に強固であることに感銘を受けた。またそのためにこれまで行われてきていた地域との対話活動なども伺い、女川町というコミュニティの規模だからこそ築けた関係だとは思いますがこれまで地域との関係性づくりに払われた努力に敬意を表したい。

〈委員〉

大型台風18号接近、東北電力の方々には非常時対応で大変な中、丁寧に対応していただき、感謝しながら視察しました。

1日目、女川情報交流館で、女川町の3.11と今後の町づくりについて説明を受け、高台から現在の町の様子を見学、押し寄せた津波の高さを実感し、想像を超える自然の力の恐ろしさを思いました。

水産関係の建設中の建物に一日も早い復興を思う一方、高台の住宅予定地は住宅で埋まるのか、新しい女川駅にたくさんの人が行き来するのか・・・これほどの痛手を受けた女川町の将来は見えにくい思いがしました。

2日目は、女川原発PRセンターでの説明とバスでの構内一巡見学（予定の3号機見学が荒天で出来ず残念）でした。

原発の安全については、「まず安全を守る」「不安をなくす」の考えのもと取り組んでいること、防災に関しては、様々な想定での個別訓練と2ヶ月に1回は通報連絡のやり取りをする総合訓練をしていること、などお聞きしました。

3.11 以前に、貞観津波を考慮に入れて敷地高さを決定したこと、津波の引き波対策をとっていたこと等、土地の歴史や自然現象を捉えた安全対策が取られていたことが印象に残りました。

3.11 後の安全性の向上の取り組みには、安全に対し多重の配慮がなされているように感じました。原発の安全対策に奥ゆきを感じ、安全への姿勢に新鮮な驚きを感じました。

住民への対応や安全に対する行き届いた配慮は、原発が電力供給地にあることが根底にあるのかと考えたりしました。

視察の帰途、一回の視察でどこまでわかるのかとの思いはありますが、電力会社により安全への配慮に厚みの違いがあるように思いました。

また、柏崎刈羽原発が、多くの人が暮らす街に隣接していることを改めて思いました。

東京電力以外の電力会社の見学は初めてでした。自然の計り知れない力も含め、考えさせられることの多い、意義ある視察でした。

〈委員〉

1日目。女川町の破壊的被害からの復旧、復興に向けて新しい「女川町づくり」のプラン、工事中の様子を見ることが出来、想像以上の被害状況に驚きです。

2日目。3号機発電所見学は台風18号の為、中止となり残念でしたが、バスの中から、さらなる安全性に向けた取り組みで防潮堤のかさ上げ工事で海拔29mになるという現場を見学する。

女川発電所は、震源に最も近い発電所でしたが、「止める」「冷やす」「閉じ込める」の安全機能が働き冷温停止ができた。無傷ではなかったが大事には至らなかったのは、先輩の方々からの教え、日頃から事前準備に備えてきたこと等々が功を奏した。

又、震災で被災した地域の住民を受け入れ、地域とともに困難を乗り越えたことが地域の方々との絆がより強く結ばれた。

PRセンターでは、創造の海の生き物を描いた200点の児童画が展示されており、建物の周りには多種類の“リンゴの木”が植えられて心が和みます。

〈委員〉

東電福島第一原子力発電所が事故の収束にてこずっている中、被災地の苦しみをよそに、各地で原発再稼働の動きが強まっている中での視察でした。まずはその一つ、石巻市に隣接する女川町の東北電力女川原発の「PRセンター」。これでもかと言わんばかりの「安全」という文字があふれていました。こうまでして、「PRセンター」を訪れた人々に「安全」をPRする執念深さに驚くばかりでした。台風18号の影響で、3号機建屋内の視察は中止。台風荒れ狂う海岸部の防潮堤の嵩上げ工事の視察ではOP約+29mとなる工事現場。柏崎刈羽はOP約+15m。約2倍ということになるが29mが最大の津波対策

と誇っていたように思います。太平洋沿岸部にある各地の原子力発電所の津波対策は 29m 前後の高さにしての安全対策が必要なのか？

女川原発は福島同様の事故まで「紙一重」だったのではないかと思います。

①基準地震動を超える最大加速度値を記録②原発停止時に原子炉冷却に必要な外部電源 5 系統のうち 4 系統を失うということがありました。「外部電源喪失回避は単なる幸運によるもの」（国会事故調報告書）。地震対策はどうかと言えば土木設備の一部、建屋の一部、電気機械設備の一部くらいの説明しかなかったように思います。

女川情報交流館にも行きました。中小企業へのグループ補助金の実現し、この女川でも再開している事業所もあると聞きましたが、取引先や販路をうばわれて、苦闘している事業所の多いのも実情でしょう。商店や食堂などのサービス業の再開もバスの中から散見できましたが、住民が戻ってこないことには先行きのめども立たないのではないかと思います。

地元紙「河北新報」（柏崎でも閲覧可能）の調査（昨年 10 月 16 日付）では、復興に向けて最も必要な施策は、「被災者の就労支援」、「住まいの再建支援」となっています。宮城県の村井知事、被災県の知事でありながら被災者・県民の声に向き合っているのか。被災者の住宅再建では、県が直接責任を持つ災害公営住宅の具体化はいまだにされていないと言われていて、岩手県では、全国からの支援金を活用して、国の住宅再建支援金に 100 万円の上乗せをしているというのに、宮城県は検討すらしていないと言われていています。村井知事は、政府の復興構想会議で消費税増税を提唱し、被災地から庶民増税を推進しました。

女川原発についてはどうかと言えば、当該世論調査でも、「再稼働反対」が 6 割を占めているにもかかわらず、「原発は産業界に必要なエネルギー」村井知事は言いきっている始末。

東電福島第一原発事故後の「時代の精神」は反原発であると思います。戦後のレジームへの憎悪にのみある安倍首相の民主主義の逆行は「3、11」後、原発への意識を変えた日本人の新しい「時代の精神」を侮辱するものです。福島県は 2040 年をめどに「県内エネルギー需要の 100%」を自然エネルギーでまかなう意欲的な目標を掲げています（12 年 3 月県議会）。これこそ「時代の精神」の具体的で、矛盾のない、発展的実践目標として歓迎したい。

〈委員〉

女川原子力発電所の安全に対する取り組みを実際に自分の目で視察できたことは有意義であった。ただ台風の影響で構内に入れなかったことは残念でもあった。なぜならより震源に近い女川原子力発電所が地震の被害はほとんどないと聞いていたことを確認したかったからだ。

IAEA による現地調査の報告からも「驚くほど損傷を受けていない」と説明があった。昨年も福島第 2 を見学したときと同様に女川も福島も地震そのものによる被害はほとんどなかったのではないかと感じた。じゃあなんで福島第 1 はあのような事故になったのだろうか。

津波の想定をより高く設定しなかっただけでこんなにも違いが生じたことは残念でならない。

今回の女川原子力発電所をまず一目みて率直な感想は敷地が高いとすぐ感じた。またよりコンパクトな感想をもった。女川は津波に対する先人の伝えをより考慮したとも聞いた。電源が残ったこともその後の冷温停止に有効であったと聞いた。女川は幸運だったただけなのか。それとも備えがしっかりし

ていたからか。当然ながら後者であってほしい。

視察前日の高台から女川の町を見て、この高台にいれば大丈夫だろうと思う私がいた。しかし私の常識をはるかに超えるさらに高い津波がきたことに驚いた。この辺なら大丈夫だろう、また絶対に大丈夫だという感覚は災害時には危険であることを感じた。だからと言って防潮堤を数十mも限りなく上げれば大丈夫とは思わない。これからの原子力発電所を運転していくためには何重ものリスク管理が必要だと思う。万が一の備えをこれでもかと思うくらいの安全管理を事業者、規制側も行ってほしい。またその安全に対する取り組みを私たち住民は理解し、その取り組みが安全だと感じるならば私は再稼働という道を進んでほしいと思う。資源の乏しい我が国日本であるから。

〈委員〉

女川原子力発電所視察の前日、女川町内および港周辺を車中より視察。その後女川情報交流館に寄り復興計画等の説明を受ける。

周辺の瓦礫はかたづいていたが震災前の写真を比べるとあらためて災害の大きさを感じた。復興を速く進めるためUR都市機構が事業全体の総合調整を実施とのことだが、被害が広範囲のため進捗率は数パーセント、復興町づくりはまだ先が長い。

1日も速い復興を望む。

2日目は女川原子力発電所を視察、台風28号の影響で建屋内での視察は中止。震災時、原子炉が放射線の漏れもなく停止。発電所が高台に設置されていた事と、電源が確保された事、津波の浸入が重要設備になかった事。

これらの追加工事は柏崎刈羽原子力発電所でも実施されたがあらためて発電所では電気が重要と認識。

最後に震災時3ヶ月程周辺避難住民を発電所内施設で受入れ、食事も社員は受入れ住民より1食減らして住民に提供されたとの話があり感銘を受ける。

〈委員〉

- 1、 予定されていた3号機の施設内視察が、台風による女川発電所の特別警戒態勢のため中止になったことが残念であった。
- 2、 同じ発電所建設で津波被害を避けられたところと、福島第一のように津波の直撃を受けたことの違いが分かったが、設計思想が内部でどのように議論され反映されたのか具体的な説明をもう少し聞きたかった。
- 3、 上記2と同じ考えで対応されたと思う海水ポンプのピット化についても、津波被害の深刻さと原発の脆弱な個所をどう守るかを考えた結果だと思った。
- 4、 津波と同時に危険性が指摘されてきた引き波対策についても、建設当初から対策が講じられていたことを聞き、柏崎刈羽原発での津波想定での引き波で影響はうけないと主張してきたこととは考え方に大きな差があることを感じた。
- 5、 防潮堤の建設についても随分と違うところがあり、電力会社それぞれで随分と対応に違いがあると感じた。

6、 台風 18 号の直撃で満足いく視察とならなかったことが残念だった。

〈委員〉

一日目、津波により、町が流され、今は、更地になっていた。かさ上げ等の整備中の町の跡に、三階建ての建物等が転がっている姿に呆然とした。私たちは、海拔 15 メートルの高台から、町の跡を眺めたのだが、そこより更に 2 メートル上まで、津波が来たと聞き、足が震えた。町民 10,014 人のうち死者、行方不明者 827 人。17 メートルの津波など、予想もできなかったのだろうなと思った。自然の脅威を感じた。

二日目、女川原子力原子力発電所。

台風接近の影響で、発電所の建屋の中を見られなかったのは、残念であったが、そんな中、対応してくれた東北電力さんには、感謝します。震源地に、福島第一よりも近かったにもかかわらず、大きな被害を受けず、住民の一時避難所になった女川原子力発電所は、対策と電源が確保されれば大丈夫、原子力発電所の安全性を、証明していると思う。

約三か月の間、構内の体育館に 300 名以上もの住民の方々を受け入れていただいたことには、場所は違うが、近隣の住民の立場として感謝いたします。

津波対策には、29 メートルの防潮堤を始めとして、電源確保等、対策は、着々と進んでいることを感じた。

〈委員〉

H26 年 10 月 5 日 6 日東北電力の女川原子力発電所内を見学した。参加人員は 18 人とオブザーバー参加 4 人。

今回の女川見学の目的は、個人的には福島との結果を分けた原因を自分の目で感じることにあった。数字を基にした説明を受けても、自然の感覚ではピンとこない。女川の町と発電所を直接見ることで私はある確信を得た。それは地震や津波の強弱でなく、東北電力及び社員の方々の地元目線の防災体制の準備が決定的に良い結果を導いた事実だと。福島との比較検討は色々あると思うが突き詰めれば組織や個人が災害に対してどれだけ正しい見識準備判断ができるかであろう。女川の安全は保たれた。自然災害は人間にはコントロールできない。しかし女川の事例は正しい見識と準備判断があれば自然災害による被害を予防しうる事を示している。

発災から 3 年以上の時間が流れた。この時間を無駄にせず、国全体の電力確保と被災者の早期救済のために、国は原子力発電を前に進めてほしい。地方を活性化させる政策を始めた今こそ、立地自治体に経済的に利益をもたらす再稼働を大胆に決断すべきだ。

〈委員〉

入会してから初めて視察研修に参加させていただきました。

女川町はテレビでは見ていたものの目を背けたくなる光景が広がっており、復興事務所での復興事業の説明に同じく中越沖地震で 7 年前に被災した私は懸命に耳を傾けざるを得ませんでした。

今までなかなか積極的な支援活動に参加しなかったことも事実です。募金等は積極的にしたものの、自分の中で「対岸の火事」だったのではないかと悔やみました。

一方で私は、私たちが利用している東北電力の電源に興味がなかったことを自覚しました。地域の会で私は「消費地の人に立地地域のことを知ってほしい」と言っていますが、「少し離れた地域のことを自分のことと関連付けて考える」ことの難しさを意識しました。

全国の立地地域は同じく「私たちのことを知ってほしい」と思っています。エネルギー基本計画には、エネルギー教育や地元振興の中で国や自治体に本気で考える姿勢を持って頂きたいと思いました。

〈委員〉

1. 女川町

震災前、一万人程の女川町の復興町づくりプロジェクトのスケールの大きさにおどろいた。これは、国の支援も大きいですが、震災前からの水産業を基幹産業とした経済の強さと原子力発電所を抱える事による財政の豊かさと復興にかける町民の強い意思と思う。一日も早い復旧・復興を願っています。

旧町立病院の海拔 16m の駐車場に立ち、ここよりさらに 2~3m も高い波が来た事を聞かされ、圧倒的な自然の力に言葉がなくなった。

原子力発電所の地震・津波対策は絶対に必要な事であるが、住民の生命を守る為には原子力以外でも県・市・村は多くの対策を考える必要があり、自分達も考えられる事を提案していく必要があると思う。

2. 女川原子力発電所

発電所と消費地域が同じからか、柏崎刈羽とは住民との接し方が少し違う雰囲気を感じられた。

特に印象に残っているのが震災後多くの住民が発電所内に避難し、照明・暖房・通信機器を使用する事ができたことである。

ふだんからの広報による信頼関係があるからと思う。

震災時の発電所の対応と事前準備に対して、「世界原子力発電事業者協会」から原子力功労者賞を受けたとの事。このような発電所こそ早急に規制基準対策を終え、再稼働し、世界に日本の技術力を示して欲しい。

台風通過時にもかかわらず対応していただいた発電所職員の皆さまにご迷惑をおかけした事をお詫びするとともに、丁寧な対応に感謝いたします。